

## 日本語教育実践研究（1）

### —「待遇コミュニケーション教育／学習」の実践—

蒲谷 宏

日本語教育実践研究（1）は、「待遇コミュニケーション教育／学習」について、実際の教育活動を通じて研究するためのクラスです。主に、中級後期から上級前期にかけての学習者が受講する口頭表現クラス（口頭表現6Bクラス）を実習の場として、学習者の口頭表現における表現能力（コミュニケーション能力）を高めるために、どのような教育／学習をすればよいのかを実践的に考察していきます。それとともに、具体的な教材や教育／学習の方法論についても検討していくことになります。

2004年度秋学期の受講生は6名でした。04年度春学期とは異なり、「待遇コミュニケーション」だけではなく、「言語文化教育」、「音声・音韻」研究室のメンバーの参加によって、担当教員、受講生相互に有益な交流の場になったと思います。今学期も引き続き、学習者の「待遇コミュニケーション」能力を高めるためにはどうすればよいのか、という話し合いを重ねつつ、実習クラスでの授業運営を進めていきました。

〈学習者が、ある「場面」において、「意図」を持って、コミュニケーションを行う能力を身につけ、高めていくためには、どのような授業を行えばよいのだろうか〉という課題の解決に向け、先学期の収穫であった「学習者の問題点を修正する方法としての、〈練習—訂正—練習〉といったロールプレイの二段階法」に加え、今学期は、①学習者の〈「意識化」—「実践（練習）」—「定着」〉といった流れをどう作っていくか、②学習者自身が、〈「きもち（意図・様々な意識）」—「なかみ（表現内容）」—「かたち（表現形式）」〉をどのように一体化していけるのか、といったことを実践・考察のためのキーワード・枠組みとして、取り組んでいきました。

それらに関する実践研究の一つの成果が、今回まとめられた3本の論考です。それぞれが、担当教員の問いかけを自らの問題として真摯に捉え、実習授業を通して得られた極めて実践的な考察であると思います。

「待遇コミュニケーション教育／学習」に関する課題は、引き続き山積している状況ですが、実践研究は、そうした課題に対して、実践を通じて解決策を考えていくという意味を持っているのだと言えます。今後も、そうした実践を通じて得られた成果について、さらに考察を続け、検証していきたいと考えています。

（カバヤ ヒロシ・日本語教育研究科教授）